應ありて、和氣藹々の裡に參會せり。會者の頷を解きたるが、時恰も正午に近づきたるを以て、茶菓の饗術家論ありて後、板谷波山氏が在學當時の同窓生の狀況を語りて來として爲すべき所なるべしといふにあり、夫れより鷹田其石氏の美

新橋を發し、 車 日には熱海に赴き、 瀧等の勝を寫生し、 て修善寺に泊し、二十三日は同所に在りて、 り六日間を以て擧行せられ、 ○本年度秋季の修學旅行 トにて歸京したり。 沼津に下車して牛伏に宿し第二 二十六日同所より小田原に出で、 二十四日には山路を踰えて伊東に至り、二十五 旅行總員二百名許り。 本年は伊豆地方と決定し、十月廿一日よ 第一日なる廿一日は、 一日は沿海の風光を探り 湯ケ島・淨蓮瀧 午前八時三十分 國府津より汽 朝日

# 東京美術學校近事〔六一四。M・四〇・十二・二三〕

本校雇を命ぜられ、金工科助手申付けられたり。○金工科助手の任命 金工科卒業生八卷於莵三氏は、十一月三十日

を以て、滿期となりたり。 ○休職滿期 教授辻村延太郎氏は、休職中なりしが、十一月廿八日

○橋本畫伯の見舞 畫伯橋本雅邦翁が、本校に在職中其薫陶を承け

月三十日、助教授に任ぜられたり

は、「乙竹岩造氏」の誤につき訂正す。 正誤 前號の本欄職員に關する事項中、「岩竹乙 造 氏」と あ るり、御菓子料として、金九十圓を贈呈することゝなせりといふ。たるを見舞はんがため、翁の教へを受けたる本校の卒業生諸氏と謀

## 関連事項

## ① 東京美術学校規則一部改正

正に伴う部分的改正がなされた。 美術学校一覧餐場所当十九年』のうち日本画科の分について同科授業法改 の保証人に関する条項が削除され、また、 保証人は不要となった。 方、 及撮影ノ年月日ヲ漢字ヲ以テ明記スベシ)」の 年内ニ撮影セシ手札形寫眞 に改正が加えられ、 明 正副保証人に関する規定が削除された。 治四十年三月、 入学出願者の提出すべき書類に関して「最近一 規則第四章「入學在學及退學規程」 なお、 (但半身脱帽ノモノタルベク裏面ニ氏名 この改正に先き立って「生徒心得」 「各科授業要旨」(『東京 したがって、これより 語句が 追加される一 (289頁参照)

## ② 図画師範科設置

学し、これより本校における中等教員養成が本格化した。に三年制の図画師範科が設置され、十月二日に第一回生十九名が入京美術学校近事」の項(30頁)に記されているように、本年六月五日成出明治四十年度年報「規程」の項(30頁) および校友会月報「東

あり、その点については幾度かの規則改正においても変わりは無か

本校は美術の作家と図画教員の養成を目的として発足した学校で

れた。 む。が約一七%、 % い 数について言えば、 本画科· 置 科目を修めた者が教員資格を得られるようになった。 まれるとともに現職教員の再教育を目的とする図画講習科が設置さ 年にはこの特別の課程が廃止され、 履習することによって教員の資格を得ることができた。 員 のが自営 が職科目を修めた者が教員として送り出されることになった。 一の西洋画科と図案科にもこの制度が適用された。 次いで学校勤務が約二八%、 そのうち四七%が中学校勤務である。 これより絵画科で五年間学び、 図画教員養成の制度について言うと、ごく初期の本校では教 |者は普通科(二年間) 卒業後特別の課程(一年間) で教職科目を 西洋画科· (作家として独立していた者ばかりとは限らない。)で約四七 戦死を含む死亡者が約三%で、 明治四十年までの卒業生総数七四七人中最も多 図案科で五年間の作家養成教育を受け、 その他の職業 教職課程は絵画科課程に組み込 その間に用器画法と教育学の (在外研究、 学校勤務が割合 したがって、 同二十九年設 明治二十五 兵役を含 その 0 日

展し、 来の日本画 師となるための専門的な教育が始まったのであるが、 いて認識を深めた正木直彦が本校校長に就任するに至って大いに進 がそれである。そして、 る。 ちで図画教員養成が行われ、 に学校当局は教員養成課程を独立させようとする動きを 示 このように、 明治三十二年以降の年報における図画教員教育課程拡充の要請 図画師範科設置という成果を得たのであった。 科 西洋 本校では明治二十五年以来作家教育に従属するか **画科** その動きは欧米視察によって図画教育につ 図案科等における教職課程が廃止された 多くの教員が送り出されたが、 かと言って従 かくて図画 その間 7 た い

> わけではなく、 これも並行して存続することになった。

乳頁の表のとおりであるが、 れた「謝辞」 が学んだマサチュセ き立って白浜がアメリカに留学したことは既に述べたが、 図 画師範科の初代教授となったのは白浜徴である。 白浜徴『白浜先生還曆記念』 ツ州立図画師範学校のシステムに倣って作 授業内容については次のように定めら 大正十五年)。 その学科目等 同科設置 同科 に先 は 6

#### 畫師 範科

れ

史 的 啚 ガ トナスガ故ニ技術家タルト同時ニ教育者タルノ學識品格ヲ 畫師範科 解剖學、 タメ各學年ニ配當シテ倫理、 ハ普通教育ニ從事スル圖畫科教員ヲ養成スルヲ以テ目 圖按法、 自 在畫, 幾何畫法、 教育學及教授法、 手工、 習字、 美學及 英語、 美 養 術

授練習、 體操ヲ課ス

倫理ハ實踐道德又倫理學大要ヲ授

教育學及教授法ハ教育ノ理論及應用、 教育史、 學 校衞生、 教授法

ヲ課ス

美學及美術史ハ第一年ニ東洋美術史ヲ、 第二年ニ西洋美術史ヲ課

シ第三年ニハ美學ヲ授ク

解剖學ハ骨骼論ト筋肉論トノ大要ヲ授

圖按法 本 自在畫ハ木炭畫、 ハ平面的模様ヲ主トシ立體圖案法ヲ ニ依リテ陰影、 鉛筆畫、 濃淡及色彩ヲ授 毛筆畫、 水彩畫等 加 其方法ハ寫生ヲ主 1 シ 石 膏 模

シ

兼テ見取及考按ノ力ヲ練習セシム

377 第7節 明治40年

第一 ・シテ初等教育ヨリ中等教育ニ至ル教案ノ編成ヲ行ハシム 年、 第三年ニハ塗板上ノ練習ヲ加へ第三年ニハ教授練習ヲ主

幾何畫法ハ平面圖法、 投影圖法、 圖法幾何、 透視圖法、 陰影圖 法

授ケ應用問題ヲ練習 ロセシム

年ニ亘リテ木工及金工ヲ授ク 手工ハ第一年ニ粘土細工、 切貫細工、 手工理論及其教授法八實習時間內 厚紙細工ヲ第 年 ーヨリ 第三

ニ於テ之ヲ課ス

習字ハ運筆ノ練習ヲ主トシ兼テ其教授法ヲ授

英語ハ主トシテ美術及圖畫教育ニ關スル敘事論説ノ講讀ヲ學修セ

4

(『東京美術学校一覧 至明治四十一年

|科目の担当者は第一回生三尾与喜蔵の回想記(後出) によって次

のとおりであったと考えられる。

Z 竹 岩 造 (嘱託、 兼教育学)

教育学及び教授法

美学及び美術史

東洋美術史

美学

解剖学

自在画 図案法

> 久 瀧 米

岩

西洋美術史

大

村 西 崖

同

右

白 浜

徴

(教授)

村 透

(同右

桂 郎 (教授)

精 (嘱託

島 田 佳 矣 (同右

木炭画

岡 田  $\equiv$ 郎 助

(教授) および

小 林 万 吾 (助教授)

小 島 憲 之 (嘱託)

六四

郎

鉄

也

(助教授) 同 右

および

手工

幾何画法

毛筆画 水彩

鶴

田

機

水

(助教授)

画

手工

教授練習

体操

習字

英語

森 田 亀之輔

岡 沼 水 上

田

起

作

(嘱託)

(助手)

田 谷 原

雅

雇

白 浜 徵

赤 間 運 蔵 (雇)

きたのは本校に同科を置いた利点の一つであった。 岡田起作である。多くの科目を現職教官の兼任で済ませることがで このうち同科開設にあたっての新採用は上原六四郎、 乙竹岩造、

中学校、高等女学校等)の図画教員の養成機関が無かったために、 年六月二十五日)がこれを大きく採り上げ、 術学校や画家のもとで修業した者が文部省の検定を受けて教員とな 題する社説を掲げている。 っていたが、それらは技能の点では優れてはいても、教員として必 図画師範科の設置については、 その要旨は、 『教育時論』第七九九号(明治四十 従来は中等学校(師範学校、 「図画師範科の設置」と 美

要な修業をしておらず、芸術家にありがちな非常識を良しとする弊

拘らず、久しく軽視されてきた。 習すらあるので、 任務である、とする。 含んでいる。 また、 各種教員の中で図画教員が一番多くの不適格者を その結果、 义 これを改革するのが図画 「画は非常に重要な科目であるにも 回師範科 0

> Щ 無

を持たぬ不完全な人物を社会に輩出しているとし、 拘らず現行の教育は知的方面に傾き過ぎており、 い 教育においては理学すなわち知的方面の教育と文芸すなわち を図るために設けたのが図画師範科であるとした上で、 面 載されている。ここで正木は、 から 次いで同誌には「趣味教育に就て」と題する正木直 (「趣味」) の教育とが調和的 その点、 図 .画師範科生徒に対する期待の 我が国 では昔はむしろ情的教育が発達していたにも に偏重偏軽なく行われなければならな 「完全な人物」を目的とすべき学校 班を示している。 美醜を判断する力 情的教育の充実 彦の談話 次の ように 情的方 から 掲

を正 とは勿論である。 として盡力しなくてはならぬ、 文芸をさすか。」 於ては、 ふには、 らぬことである、 畫教育に就いては ふことが必要である、 確に寫し取るといふ技能を授けることは、 教師自身、 古い時代からして、 澤山 に就いては、 然れ 「乍倂その以上は生徒の趣味を高めることに、 に持ち傳へてをる國は稀である、 亦その技藝に堪能で無くてはならぬといふこ (圖 共この堪能以外に、 [畫以外の敎育 世界各國中、 隨分大家巨匠を出してをるのであ 余は 門外漢なれば 云はず)物の形 而して如此重き仕事をやらうとい 〔前段で述べている音 凡そ我國程其祖先の藝術 藝術の歴史に精通する 第 一に務めねば 而 して我國に 主 ts

> て、 如 又我國には他國に無い澤山の至寶を有しながら、 品に接して、 **覧會などに出陳して、** K 何なる結好の作品 一方社會教育に於ては、 巨利に、 かつたからして、それら大家巨 これは我尊き國體の有 或は貴族の家に澤山持ち傳へられて有るのである。 之よりして感化を受けしめることが必要である。 如何なる偉大な、 般の國民をして彼の立派なる美術上 如此遺物を博物館等に 難さに、 一匠の作品が、 古來 世界美術史上に立派な地 度 も革命といふことが 或は皇室に或 陳列し、 般の人々 或は展 一の作 は は 故



図画師範科の教師と第1,2期生 第1列左より4人目 三尾与喜蔵 第2列左より2人目 波根義三, 鶴田機水, 乙竹岩造, 上原六四郎, 白浜徵, 水谷鉄也, 玉田文作 第4列右端 岡登貞治

る。 初期の 就いて親切に教授して、 ものが奪いか、 術上の歴史を話し、又名品傑作を生徒の目に見せて、 では知ることが出來ぬのであるからして、 位を占むべき、 達せしめなければならぬ。 図 又如何なる點が善いかといふことをば、 大家巨匠が出たかを知らない、 生徒をして不知不識の間に、 學校教育の間 勿論これ

其趣味を發

仕舞つた。

何故にこの

に如 は

此美

無教育

其品物に

画師範科の様子をよく伝えているのは左記の回想記であ

圖 畫 一師範科創立當時の回顧

> 尾 與喜藏

人だとは思へなかつたのである。

めに、 恕を願ひたい。 して居る觀あるのは、 述べて見たいと思ふ。 員霜田氏のお勸めにより、 師 此お話は自然、 白 濱 先生の目出度き還曆紀念號發刊につき、 私は圖畫師範科第一期の卒業生であるが爲 誠に止むを得ない事で此點偏に各位の御宥 私及び、 少しく我圖畫師範科創立當時の 私のクラスの出來事の記事で始終 編纂委 口 |顧を

思つて居た矢先きであつたのと、 校の職員室で官報を見て居た、すると圖畫師範科生徒募集の廣告 0 2目に映つたので急に愉快になつて來たと云ふのは、 | 發展の見込もないので何か變つ 師範學校を出て丁度四ヶ年目、 話は今から二十年も前に遡る、 今一つ私は生來、繪が下手の横 明治四十年の或る日、 た向上の道に、 向に面白い事もなく、 ありつきたいと 當時私は縣 私は小學 又前

米

小林、

赤間、

岩村、

上原、

鶴田の諸先生であつた。

前記の教

居た際であつたからである。 好きであつて、事によつたら文檢でも受けて見ようかとも思つて

好機逸すべからずと云ふ調子で、サッサと入學志願の手續をして した加減か餘り良い顔もしなかつたが、そんな事には頓着なく 早速私の勤めて居た學校長に、 入學受験の話をして見たらどら 制度改革期

べてハイカラであり優雅であつたので、 然日本人離れをして居るのと、 よく通つて居るのと、 あった、と思ったのはそれは白濱先生であった。 入學試驗當時の試驗官は、 洋服の着こなし、 日本語のステキに旨い外人の先生 色が白くて目は窪み、 並に一擧手、 我々田舍者には到底日 英語の發音が全 鼻筋が迚 投足が凡 本

村 れは當時我國第 に我圖畫師範科が呱々の聲を擧げた教室なのである。 な向きに建つて居た。 て、 かつた。今の櫻木町へぬけるあの大道路は全部學校の境內であつ 込みがあり、其奥には舊式ではあるが相當立派な玄關があつて、 焼けない前であつたので今の様に境内が左右二ッに分れては居な 寸見には今の美術學校よりは遙に雄大、 其玄關を入つて右側で 入學試驗もすんで愈授業が始まつた、 島田、 本館の建物が、今の大道路の眞中あたりに、 水谷、 流の方々ばかりであつて、白濱先生を始め、 森田、 爪先き上りに正門を入ると正面に立派な植 一階にあつた約四十坪位の部屋こそは、 岡田起作、 沼 闰 其頃の美術學校は、 壯嚴な感じがあつた。 乙竹、 岡田 動物園と同じ様 講 師の顔 實 久 振

居ると、先生は後から不意に肩をポンと叩いて「オイ三尾、 仕 始 極景氣よく風呂から出て來る所をネー…」之は其朝、私が生れて 朝三尾君はスツカリ僕に見つかつちやつたんだ、手拭を肩に、 は馬鹿に景氣がよかつたネー、 髪を六七寸も延して美しくハイカラに分けて來たのがお目にとま 來たじやないかスツカリ男ブリが上つたぞ」等と冷かして行かれ 敎 や日本畫の時には て控室に行かれるのは、 室では、 たからである。又或る時、 舞つた爲である がて朝湯に入つて歸る途中何の因果かバツタリ先生に出會して るのが常であつた、 はつて居る時には先生はヌキ足サシ足で通られたが、 ぬと云ふ、 た八疊敷位の部屋が先生の控室であつた、從つて先生が出勤し 之は其頃我妻 各學科、 誠に奇妙な間取りであつた、それで私共が學科でも 日本畫並にデッサン等を教はり、 〔栄〕 「ドウダ旨く畫けるかい」等と會釋をして通ら 或る朝 君が、 どうしても我等の教室の中を通らねばな 私が熱心に石膏のデッサンをやつて 「ヤア我妻、今日は馬鹿にめかして 朝湯は振つてるぜ、 若い美しい細君の手前 オイ諸君、 其 入教室 デッサン 同君は頭 の 今朝 奥 至 4 ま

庫の傍にある煉瓦造りの建物を、 慢して小さい弟共に譲つてやらなくてはいけない、 年級になり第二期生の今井件次郎君等の組が入つて來て、 けて仕舞ふ天禀の魅力を有して居られる樣である其內に私共は一 合が悪くなつて來た、 に對者に何かある教訓的のヒントを與へ、周圍の者を惹きつ ナ風に先生は、 萬事極めて輕く、愛想よく、 先生は 第一 君等二年の教室にあてるから其 期生は兄貴だから少し位我 今度からは文 知らず識らず 教室

> 居る。 本館で學ぶ事が出來、 全く牢獄其儘であつたが幸にも三年には教室の都合がついて再び れた程、夏は釜中の如く暑く、 肉の雄である岩村先生が講義に見えて「コリヤ地獄だ」 な鐵棒の格子が取り付けてあり、 へさらに低く窓の數は少くて小さくおまけに窓と云ふ窓には頑 物は成程煉瓦造りではあるが倉庫の古手である、 つもりで……」 同 !は暫し呆然として開いた口が塞らなかつた、 此處で素描や、 等と云はれて、 其處で卒業製作を作る事が出來た。 木工をやらうと云ふのだからたまらない、 冬は冷藏庫に居る様な感じがする 行つて見ると之は驚いた。 入口は黑金の觀音開きに出來て 其後、 天井は頭 警句と皮 等と云は 件 . の建 5

之を錦巷と名付け毎月一回宛發行する事にした。 生の發案で、 は、 る事にする、云々」間もなく正木校長から、美術學校 會を凌駕する樣な盛大な會となし、天下に呼號したいも 雄飛する芽生えの會である。 職員合せて三十名足らずであるが、之は將來我圖畫教育界に發展 かろうと御説明下さつた、之が錦巷會の始まりである。 ピーチがあつた、 を開いて、 共が入學して確か二ヶ月目であつたかと思ふ、最初の同級茶話 之から少しく內容的方面とでも云ふべき事柄を述べて見る。 元 就ては會の名を何と附けたが良いか之は正木校長にお願 錦小路と云つたから、 諸先生の御臨席を乞ふた、 生徒各自原稿の持ち寄りで回覽雜誌の様な物を作り 曰く「只今會合して居る者は生徒僅に十九名教 希くは將來、 之に因みて錦巷會と命名したが 其時白濱先生のテー 高等師範に於ける茗溪 正木校長、 の 其 所 ので 在 す 私

る

先生等からも屢有益な御寄稿があつた、

之は面白い紀念物として

其他、 分と、 かつた。 持ち上つて來る繁多なる雜務とは、 ね の著作、 かゝつて居たのであつて、其忙しさは到底言葉に盡す事が出來な い時期であつた、創立間もなき師範科は、 に餘ると云ふ有様で眞に目覺しき奮鬪的生活を繼續せられた。 私共が入學してから三年に至る迄の間は先生に取つて最も忙し 只今行はれて居る新定畫帖の編輯に努力を續けて居られた、 東西奔走して其充實に力めようとする努力と、之に附隨して 缺乏其物であつた、之を補ふべくあらゆる方面に交渉を交 當時教育社會に於て強要して止まなかつた各種圖畫教育上 夫れと同時に先生は、文部省の教科書編纂委員で<br />
あ 或は各地に於ける圖畫科講習會等重大なものだけでも五 殆んど白濱先生一人の双肩に 凡べてが不備と、不充

すべく餘儀なくせられた。在學中。學校の授業だけで其日を終るなければならぬと云ふ責任感、此二つによりて我等は固き決心を でも短く、 するもの、 ものは一人もなかつた、文庫、 師範科卒業生の腕前を世に吹聽する見本である、其見本の良否に よりて將來、 の重大なる責任感、 寸の時間と雖も有效に活用して出來るだけ十分なる、力を養は 度の懇親會さへも餘興等は大の禁物、 こうした我等の目前に展開せられて居る先生の大奮鬪と、 又少からん事をのみ希望し、 塾に通ふもの、大學其他へ聽講に出るもの等々、 師範科卒業生の賣れ口に甚大の影響を來すが故に、 それは、 師範科第一、二、三期等の卒業生は 圖書館等に夜の閉館迄も沒頭研究 サツサと茶を喫み菓子を テーブルスピーチの少し 月の 私共

> たべて解散し、 おのがじゞ研究に立ち向ふのを常とした。

云はる、様になつたのは嬉しかつた。 決心が次第に認められて、諸先生からは師範科を模範にせよ等と と努力」と云ふ言葉をモットーとして奮鬪し始めた所が幸にも其 る重大な問題であると云ふので、唯云ふとなく我師範科は めとして折角の各種著作にも惡影響を及ぼす恐れがある。之は では到底良い買ひ手がつく筈がない、 抱いた、我等は將來賣物であるのに本校生徒一般の評判がこんな 白くなかつた、そこで我等師範科生は之に對して少からず杞憂を 地方等で屢々暴れた爲めに、本校生徒一般に對する世評は甚だ面 其頃美術學校の或科の中には、 隨分元氣旺盛な者が居て市内や 又白濱先生の新定畫帖を初 「常識

度かつた 手腕等について世人も多少不安に思つたせいか、 師範では我師範科に類似の卒業生を一二回出して居た)其人格、 が美術學校で養成した最初の卒業生であり、 ない奴等が居て時々手古摺つた。兎角する内に卒業期が近づい 5 いには雇入申込の數が幾等か卒業の數よりも多くなつたのは目 は並大抵ではなかつた、中には自分で良い口を見附けて行くもの ると云ふ有様ではなく、此點について、一時、 な娘をこちらへよこした。お蔭で耻しがつてどうしても裸になら 面 知己からの傳手で就職する人等もあつたが、それでもおしま 白 いつも新しい子を賴みます」と云つてはモデル志願の無經 いのは例の宮崎モデル婆さんである「師範科はお人柄だか (此頃已に東京高等 白濱先生の御苦心 就職口が殺到す た

全部の就職口がきまり、 愈免狀を授與された時の先生の喜びは

賜でなければならぬ。 賜でなければならぬ。 別の辭、熱烈なる激勵の御言葉を賜つたのは偏に先生のとなる送別の辭、熱烈なる激勵の御言葉を賜つたのは二十年後の今とし、日一日と世の信用を高め、今や錦巷會は膨然たて卒業生を出し、日一日と世の信用を高め、今や錦巷會は膨然たる一大勢力となつて教育會に蟠居する様になつたのは二十年後の今太のだければならぬ。

事にする。 ・ 此處に謹んで先生の還曆を祝し倂せて御長寿を祈つて筆を擱く

(『白浜先生還曆記念』大正十五年。編集代表今井伴次郎)

べている。 同者のやや簡略な回想記が掲載されており、その中で次のように述同者のやや簡略な回想記が掲載されており、その中で次のように述なお、『東京美術学校校友会誌』第十九号(昭和十五年十月)にも

十九名の第一期生は比較的年輩者が多く、中には若い先生とは 一大名の第一期生は比較的年輩者が多く、中には若い先生とは 一大名の第一期生は比較的年輩者が多く、中には若い先生とは 一世に表示して下の、本科に於て相當に修業を積み入學試験にパスして入つて來た もの等に分別者が揃つて居た爲めか將、一體に頭が惡く怠けて居 では追ついて行けなかつたせいか兎に角勉強家が多く三年間誰も がどの先生から一度でもお小言を頂いたのを見た事が無かつた。 面白いのは或る時白濱先生が夕食後ブラリと文庫へやつて來られ た。するとそこの薄暗い電燈の下で、古畫や圖案の著書等と首つ で、するとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ で、するとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ で、まるとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ で、するとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ は、するとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ は、ずるとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ は、ずるとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ は、ずるとそこの薄暗い電燈の下で、古書や圖案の著書等と首つ は、ずるとそこの声にあったが「君等病氣して休學者が出たりすると

て下さつた事などがあつた。ルクホールへ引張り込み其頃珍しかつたマコロンケーキ等を奢つルクホールへ引張り込み其頃珍しかつたマコロンケーキ等を奢つ困るから夜だけは休むが良い、さあどこかへ行かう」と近くのミ

森田先生は昔も今と少しも變らぬ落ちついた方で、或る日クラスの誰かゞあの若い先生に一度叱られて見よう等と申合せた譯では無かつた樣に思ふが其日先生の英語の時間に誰も講義室に行かたかの樣平然といつもの通り講義を續けられた。之は屹度先生が叱る事を忘れたのだと云ふので誰かゞ前時間のサボリ事件を云ひ叱る事を忘れたのだと云ふので誰かゞ前時間のサボリ事件を云ひ出した。然るに先生はフン夫れは良かつたとニッコリせられたばけ、一同は聊か拍子抜けの體で內心赤面した事であつた。

が爲め專門指物師が屢指導を乞ひに來る有樣であつた。僧から叩き上げた其道の達人でさへ到底及びもつかない神技、之の元祖、全く天才肌の方で例へば先生の作られた簞笥、机等は小上原六四郎先生は寡默の人格者、內外其名も高き我國手工教育

餘暇に作られたのだと聞いて全く驚くの外は無かつた。とも思はれず天女の樂とは斯う云ふものかと思はじめ未だに耳朶とも思はれず天女の樂とは斯う云ふものかと思はじめ未だに耳朶とも思はれず天女の樂とは斯う云ふものかと思はじめ未だに耳朶とも思はれず天女の樂とは斯う云ふものかと思はじめ未だに耳朶とも思はれず天女の樂とは斯う云ふものかと思はじめ未だに耳朶とも思いている。

を學校から支給された。當時の七圓は今の約三十圓位に相當する我々は在學中毎月七圓〔六円の誤りか。깨頁参照。〕宛の 手 當餘暇に作られたのだと聞いて全く驚くの外は無かつた。に殘つて居る。猶其時先生が吹かれた精巧な尺八其物も御自分で

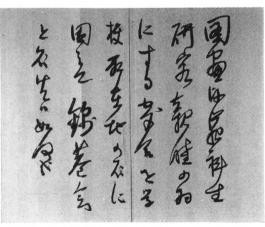
あつた。 はな卒業後間もなく經費節減のあほりで廢止せられたと云ふ事でけると云ふ低物價時代であつたから少々有り難かつたが此手當もけると云ふ低物價時代であつたから少々有り難かつたが此手當も勝買力があつて、當時三食附一ヶ月金八圓也で下宿して居るもの勝買力があつて、當時三食附一ヶ月金八圓也で下宿して居るもの

る。 徴先生追悼号』(昭和四十九年。錦巷会麻敷育学研究室)があり、参考にな 徴先生追悼号』(昭和四十九年。錦巷会東京芸術大学美)があり、参考にな ほかに、白浜徴および白浜在職中の図画師範科については『白浜

史」(金子一夫著。 帖』を出版し、 その会長となった。これらについては前出 みた。また、白浜徴は同年『図画教授之理論及実際』 順調な運営と相まって、 七五三吉らによる『尋常小学新定画帖』が発行され、 ŋ 出した。 図 画 [師範科は明治四十三年に第一回卒業生を全国の中等学校へ送 同年正木直彦、 方図画師範科の同窓会である錦巷会が結成されて 『美育文化』所載)中に詳しい論及がある 明治三十五年以来の図画教育改革は完結 白浜徴、 上原六四郎、 「続・日本近代美術教育 小山正太郎、 『新式練習 図画師範科 阿部 を 0

### ③ 錦巷会

四十四年三月創刊され、 ように、錦巷会は明治四十年十一月に発足した図画師範科の親睦団 「本会ハ東京美術学校図画師範科職員卒業生並ニ在校生徒ヲ以テ組 前項中に掲載した 会名は正木直彦の命名による。 「図画師範科創立当時の回 これに会則が掲載されてお 同会の機関誌 顧 り、 に記されて 『錦巷』 第三條 は明 K 治 る



正木直彦の「錦巷会」命名書 (『錦巷』第1号より転載)

る。 送別会を催したことがわかる。 式の時期になると、 科関係教官や卒業生の講話、 改められている。 う規定があるが、 織ス」と記されている。 機関誌については毎月編纂して春秋二回特別号を刊行するとい これは明治四十四年四月に至り、 『錦巷』の雑報欄によって、 全国各地の学校へ赴任する生徒のために盛大な 会長には同科主任を推すと定められ 絵葉書競技、 余興などが行われ、 錦巷会では図画師範 春秋二回発行と 7 卒業

# 東京美術学校規則(「総則」)改正

4

第一章「総則」が次のように改正された。図画師範科設置にともない明治四十年七月に東京美術学校規則